

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720231

研究課題名(和文) 学習者とともに学ぶ持続可能性日本語教育教員養成プログラムの構築

研究課題名(英文) Program Development for Teacher Training Based on Japanese Language Education for Sustainable Living

研究代表者

トンプソン 美恵子(平野美恵子)(THOMPSON, Mieko)

早稲田大学・日本語教育研究センター・准教授

研究者番号：20401606

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：H24年度は、持続可能性日本語教育のシラバス・教材試作と実践での運用を国内で行い、グローバル化社会を生きる「群像」と、自他が一蓮托生なことを実感する「食」に関するテーマが、自他・世界の関係とそこでの生き方を意識化させると確認した。H25年度は、海外の日本語教師研修での教材の応用と教師の意識を調査し、教師が世界認識醸成の必要性和教師の役割に対する不安を感じていることを示した。H26年度は国内の実践を対象とし、学生に対する教師のフィードバックを分析した。教師自身の自問自答プロセスを学習者に提示、学び手の思考を承認しながら、情報提供や精緻化、自発する問いの促進、などがその特徴として見られた。

研究成果の概要(英文)：The first year, I made syllabi and materials for JSL for sustainable living and applied them to JSL practices; it is suggested that role-models living in a global society and themes about food are crucial elements for them. The second year, I applied the syllabi and materials to teacher training programs overseas, and examined JFL teachers' perception about teaching Japanese for sustainable living, for which teachers accompany with learners as learners. The result shows that teachers feel necessary to gain insight into the global world, but don't know how they can connect the insight to teaching and support learners learning. The final year, I examined JSL teachers' feedback upon learners' reflection to reveal how teachers accompanying with learners as learners are like. The teachers showed their own thinking process to their learners, provided them with further information, paraphrased learners' opinions, and encouraged their learners to question about the global world.

研究分野：日本語教育

 キーワード：持続可能性日本語教育 同行者としての教師 教師教育 協働 グローバル化社会 教材開発 対話  
内省

1. 研究開始当初の背景

年々激化しているグローバル化により、人・モノ・情報の移動のスピードも加速している。経済の揺らぎはたやすく国境を超え、さらには雇用などの人々の生活に直結した問題に発展する。こうしたグローバル化という劇的な変化の渦中にあるのは、世界中の人々が先行きを見通せず、学習者のみならず教師も不安定な状況に置かれており、グローバル時代を生き抜くために、何をどう教えればいいのかを見出しにくい。

そこで、岡崎(2009)は、グローバル時代をどう持続可能に生きるかを、学習者と教師がともに考え、追求していく「持続可能性言語教育」の展開を提案した。言語教育において持続可能な生き方を追求するのは、「言語のあり方の良さは人々の生き方の良さと一体」(岡崎 前掲)であるためである。ツールとしての言語教育が言語形式の学習に注力する一方、持続可能性言語教育は、言語と内容の学習を共起させることを目指す。持続可能性言語教育は、教室内でグローバルな内容を各人を取り巻く土地固有のローカルな視点から思考し、自己を起点として問題に向き合うことで、教室外で「自分なりの生き方」が追求できる高度な思考力と応用力を育成する内容重視の言語教育である。

持続可能性言語教育においては、教師も自己を起点としてグローバルな問題をローカルな視点から検討し、「同行者としての教師」として学習者とともによりよい生き方を追求していく(岡崎 2010)。刻々と変化するグローバル時代にあるのは、高度人材を育成する持続可能性言語教育プログラムの拡充と、そのための教員養成の体系化が喫緊に求められる。

そこで本研究は、学習者とともに学び、ともに生き方を模索しながら、持続可能性日本語教育を担う「同行者としての教師」を追求する。本研究は、日本語教員養成プログラムを通じて醸成される教授能力としての「同行者性」を様々な機関・学習者へ波及させていくことを目指し、日本(JSL)に加え海外における日本語教育(JFL)を射程に入れ、学習者とともに持続可能な発展を目指す日本語教員養成プログラムのモデル構築を図る。

2. 研究の目的

本研究の目的は、変動する社会や多様化する学習者に鋭敏に対応する応用性の高い教授能力を形成する「持続可能性日本語教育教員養成プロジェクト」を発足させ、グローバル時代を担う高度人材の育成を目指し、自身も持続可能に成長していく日本語教員養成プログラムの構築を図ることである。そのために、以下の研究課題に取り組んだ。

- 1) よりよい生き方を追求する力を醸成する持続可能性日本語教育のシラバス・教材とはどのようなものか。

- 2) 日本語教師は、持続可能性日本語教育及びこの実践を支える「同行者としての教師」をどのように捉えるか。
- 3) 持続可能性日本語教育において学び手の学びを促す「同行者としての教師」の役割はどのようなものか。

本研究では、第一に、文献整理などの持続可能性日本語教育に関する基礎調査を行ない、シラバス・教材を試作、JSL の実践で試用することで、上述の「自分なりに生きる力」を醸成する言語教育の骨組みを作る。第二に、その骨組み、すなわち持続可能性日本語教育を具現化したシラバス・教材を JSL・JFL の日本語教師研修にて発信し、そこででの反応を受け、様々な実践への応用可能性と課題を検討する。第三に、継続的に持続可能性日本語教育のシラバス・教材を試用する実践の場を設定し、学び手の学びと教師の学び及び教師による学び手への働きかけを記述することで、持続可能性日本語教育における教師の役割を明らかにする。

以上三点を追究することで、持続可能性日本語教育の実践を確立し、その実践を担う日本語教員養成プログラムのモデル構築を図る。

3. 研究の方法

上述の研究目的を遂行するため、基礎調査 教材・シラバス作成 実践 研究(評価) 改善のプロセスを JSL (留学生対象日本語科目、日本語教育副専攻科目、日本語教師研修、リベラルアーツ科目)および JFL(日本語教師研修)環境で連続性ある形で生み出した。

研究を遂行するに際し、研究代表者は、以下の研究協力者とともに「持続可能性日本語教育教員養成プロジェクト」を発足させた。研究協力者を表 1 に示す。

表 1. 研究協力者

研究協力者	所属
岡崎眸	城西国際大学
佐藤真紀	東北学院大学
鈴木寿子	早稲田大学
張瑜珊	新生医護専科学校(台湾)
半原芳子	福井大学
房賢嬉	国土館大学
三輪充子	NPO 法人こども LAMP

2015 年 6 月現在

いずれの研究協力者も持続可能性日本語教育の実践経験かつフィールドがあり、質的手法を専門としている。研究協力者には、実践フィールドでのチーム・ティーチング、実践及び持続可能性日本語教育に関する情報提供、データ提供及び分析、等の協力を得た。したがって、研究課題を遂行するためのフィールドとして国内外いずれも数か所が確保された。実践及び研究は概ね研究代表者と研究協力者が協働で行なった。

2章で示したそれぞれの研究課題に応じた収集データを示す。

- 1) 持続可能性日本語教育関連図書及び論文、JSLの実践における教師(研究代表者、研究協力者)と学び手・学び手間の相互作用、教師・学び手による内省ジャーナル及び教室活動シート
- 2) JSL/JFLの日本語教師研修・日本語副専攻科目における参加者のアンケート回答、ふり返しコメント、活動シート
- 3) JSLの実践における教師と学び手の相互作用、教師・学び手による内省ジャーナル及び教室活動シート

H.24年度は、JSL環境で文献調査及び実践を通じたデータ収集を行ない、主に研究課題1に取り組んだ。H.25年度は、H.24年度の知見に基づき、主にJFL環境での実践及びそこでのデータ収集を行なった。H.25年度に取り組んだ研究課題は1及び2である。H.26年度は、JSLにおける実践を対象に研究課題3に取り組んだ。

なお、いずれのデータも質的手法を用いて分析した。

#### 4. 主な研究成果

##### 4-1. 持続可能性日本語教育のシラバス・教材試作と運用

H.24年度は、トンプソン・鈴木(2012)などの基礎調査に基づき、持続可能性日本語教育のシラバス・教材試作を行なった。これらを国内の留学生対象日本語科目、日本語教育副専攻科目、リベラルアーツ科目の実践で試用し、実践への応用後、受講生の内省ジャーナルや教室活動のディスカッション記録(教室活動シート)などを質的かつ縦断的に分析した。H.24年度に行なった分析の主な結果は以下の通りである。

・グローバル化社会を生きる群像を通して世界の動きと自己の生き方を意識化させることが、問題を他人事にしない思考力と‘自分なりに生きる展望’を醸成する(トンプソン 2013a など)。

新聞記事やニュースなどの二次情報は、自己と世界の関係当事者として考えさせる材料とはなりにくい。

・生産者と消費者が一連托生であることを実感させる‘食’に関するテーマが、グローバル化社会で生きる展望を見出す際に有効なトピックとなる。(トンプソン・鈴木・小田・佐藤・張・房・半原・三輪・岡崎 2012 など)。  
グローバル化社会のトピックとして選ばれることの多い‘雇用’に関するテーマは、競争が強調されることで、自他ひいては世界のあり方をよりよくしていくための展望を見出すという着地点には到達しにくい。

・教材を教室活動で用いる際、思考と既有知識の整理のための‘事前課題’、‘事前課題’を踏まえた授業での‘議論’、そして新たな視座・知識と既有の思考・知識を統合させるための‘ふり返し’の三部構成を意識することで、‘自分なりの生き方’を持続的に考える力を醸成することが可能になる。(鈴木・トンプソン・房・張・劉 2012、報告書など)

##### 4-2. 持続可能性日本語教育に対する日本語教師の認識

H.25年度は、H.24年度の知見に基づいて精緻化・改善を図ったシラバス・教材をJFLにおける日本語教師研修に応用した。ワークショップを通じて現地の日本語教師に教材を使った教室活動を体験してもらうことで、第一に、持続可能性日本語教育の理解を促進すること、第二に、学習者とともに学ぶとはどういうことなのか、‘同行者としての教師’のありようを体感してもらうことを目指した。JFLにおける日本語教師研修は、韓国(池田・トンプソン・房 2013 など)および台湾(トンプソン・佐藤・鈴木・半原・房・小田 2013b など)で行なった。それぞれの研修においてアンケート調査を行ない、持続可能性日本語教育及び同行者としての教師に対する認識を分析した。また、JSL(リベラルアーツ科目、日本語教師研修など)においても教師による内省ジャーナルを対象として分析した。

分析の結果、明らかになった主な教師の認識を以下に示す。

##### JSL教師の主な認識

・持続可能性日本語教育を教師が担うためには、教師自身がグローバル化社会という世界に対する知識をあらかじめ持っている必要がある。(報告書など)

‘どう教えるか’以上に‘何を知っているか、それに対してどう考えているか’が重要となる。

##### JFL教師の主な認識

・教師が教室でどのような役割を担えばいいのかわからない。(トンプソン・房・小浦方・池田 2014 など)

教師がトピックに対する知識を持つことと、実践において学び手の学びを促すことを結びつける必要がある。換言すれば、人間としての自己と教師としての自己を一体化させた実践を行なうための方法を示す必要がある。

##### 4-3. 持続可能性日本語教育における同行者としての教師：教師の役割

H.26年度は、H.25年度の結果を踏まえ、持続可能性日本語教育の実践において、教師はグローバル化社会という世界に対し、1) どのような知識を持ち、どのように世界を見ているか、2) そのことが教師の役割とどのように関係しているかを探った。JSLにおける実

践(日本語教育副専攻科目、リベラルアーツ科目)を対象とし、学び手の内省ジャーナルとそれに対する教師のコメントを主なデータとして分析した。主な分析結果を以下に示す。

- 1)
  - ・教材や教室活動で提示されたテーマに対し、教師自身の経験を関連付けて理解し、また自発する問いに対し、調べて既有知識と統合させる。(三輪・佐藤・鈴木・トンプソン・野々口・半原・房・岡崎 2014 など)
  - ・教師による世界認識と自分自身の経験の関連付けおよび自発する問いは、他の群像による世界認識、事例の提示によって促進される。(鈴木・トンプソン・房・張・劉 2014 など)
- 2)
  - ・1)の教師自身による理解と自発する問いに対する回答プロセスを学び手と共有する。(三輪ら 2014 など)
  - ・学び手に対し、学びのプロセスのモデル提示を行なう。すなわち、教師が学び手の群像となる。
  - ・学び手の理解や考えに対し、共感を示しながら、さらに情報提供や抽象化して精緻化する。(トンプソン 2014 など)
  - ・学び手に承認を示すことで、「答えのない問い」の追求を支えると同時に、内省を深めることを促す。
  - ・学び手の内省をめぐり、さらなる問いを教師自身や学び手に投げかける。(トンプソン 2014 など)
  - ・学び手による自発する問いを促す。

#### 4-4. まとめ：持続可能性日本語教育教員養成プログラムの構築

以上の結果から、持続可能性日本語教育を担う‘同行者としての日本語教師’を育成する日本語教員養成プログラムの試案を述べる。図1にプログラム構成を示す。

第一に、‘自分なりの生き方’を学び手とともに追求するための素地として、教師自身が生きている世界を自己を起点に把握する段階を設ける。‘いかに生きるか’を考える上で、今自分が生きている世界がどのようなになっているかを知ることは前提となる(トンプソン 2014 など)。また、教師間で各自の世界認識について共有することで、世界認識に対する様々な視座に触れることにより、各自の世界認識をさらに拡大・深化させていくことが期待される。世界に対する知識を獲得し、自分自身の経験や生活に関連付けて世界認識を醸成させることは、やがて学び手の思考の醸成を支える‘同行者としての教師’の教授能力となると考えられる。

その際、研究課題1で述べたように、「食」に関連するテーマが、自己・他者・世界のつながりをより身近に感じられる点で有効だろう。また、「食」をめぐりテーマを教師が当事者性を持って把握するように、対学び手

と同様、群像を意識した素材を提供することを提案したい。

‘いかに教えるか’に不安を持っていたJFL教師に対しては、第一段階での世界認識の醸成により時間をかける、常に教師らが思考している内容自体が実践でどのように活用されるかを検討する、などの配慮が考えられる。

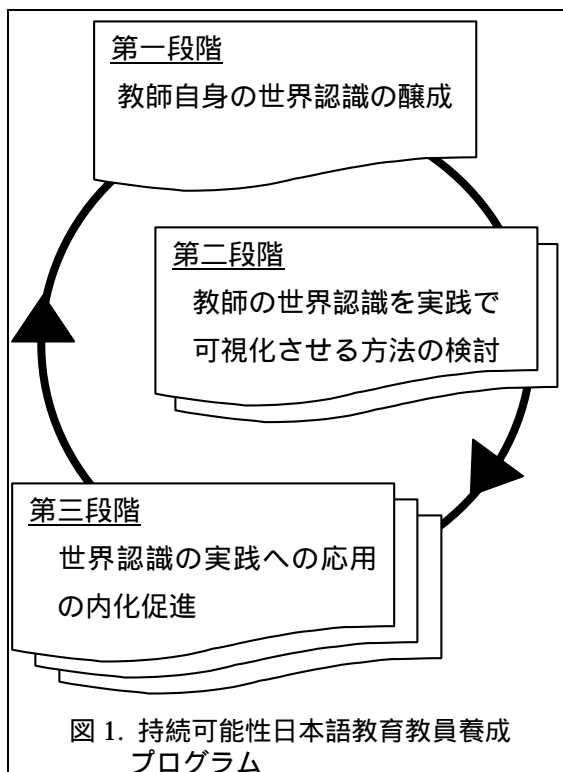


図1. 持続可能性日本語教育教員養成プログラム

第二段階として、獲得した世界認識を実践の場において提示する方法を模索する場を設ける。そこでは、各教師の実践の場でそれぞれの世界認識を学び手が自己の経験や背景に関連付けて受信する、すなわち学び手と同じ世界を生きる当事者として教師による例示を理解することを促す教室活動の工夫を教師間で検討する。この検討を通じて、教師は様々な学び手の反応とその背後にある彼らの世界認識のありようを各教師から知ることができる。そのことにより、多様な学び手に対する多様な提示のあり方を検討することが可能となるだろう。

具体的な検討の場面と方法として、学び手の内省ジャーナル作成をウェブ上の授業支援システムで行なうようにし、教師のコメントを公開制とすることが挙げられる。教師が互いにコメントを読みあえるようにすると、第一段階で共有した各教師の世界認識が彼らの経験に関連付けられた形でどう実践で可視化され、どう学び手に発信されているかを知ることが可能となる。

なお、この段階では、教師自身が世界認識を醸成することと同時に、教師及び学び手の学びをメタ的に捉え、教材や教室活動を検討することが求められることを留意しておく

必要があるだろう。

最後に、第三段階として、第一段階における教師自身の世界認識と第二段階におけるその世界認識の実践での可視化方法を内省する機会を設ける。総合的なふり返りをここで行なうことを想定し、第一段階及び第二段階において教師に内省ジャーナルを課す。各段階での内省は局所的かつ短期的な視野に基づくものである。そこで、第三段階では教師自身が生きるための原動力となる世界に対する知識・認識と教師として問われる世界認識の言語化の方法を包括的かつ長期的な展望によって内省することを促したい。この段階を踏むことにより、実践で扱った素材に登場する群像、そして他の教師と学び手という様々な群像の視座を取り込み、教師である以前に一人の人間としての「自分なり生き方」を追求すること、ひいては「同行者としての教師」として「自分なりの生き方」の追求を学び手に促す力を醸成することにつながると考えられる(鈴木・トンプソン・房・張・劉 2014 など)。

以上の三段階は直線的ではなく、行きつ戻りつらせん的に進むものである。しかしながら、第一段階に挙げた教師自身による世界認識の醸成なくして、学習者とともに学ぶ教師の育成はない。実践での応用や「いかに教えるか」を考えることは授業運営の点で重要だが、何よりも教師自身が世界認識を醸成させること、そして人間としての自己と教師としての自己を一体化させることが不可欠であり、そのためには第三段階で挙げた総合的なふり返りが鍵となるだろう。

以上、本研究は、学習者とともに学ぶ日本語教育教員養成のモデル構築を行なった。

(参考文献；本科研に関連する業績を除く)

岡崎敏雄(2009)『言語生態学と言語教育 人間の存在を支えるものとしての言語』凡人社  
岡崎敏雄(2010)「言語生態学に基づく持続可能性日本語教育方法論- 生存を主題とする学習のデザイン-」『文藝言語研究. 言語篇』57, 75-121.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

鈴木寿子・トンプソン(平野)美恵子・房賢嬉・張瑜珊・劉娜(2014)「人間の福祉を志向する日本語教師養成論のための実践研究—言語生態学の観点から」『言語文化教育研究』12, pp.125-147.

トンプソン(平野)美恵子・鈴木寿子(2013)「共生日本語教育実習における対話の縦断的分析-共生を目指すアプローチの変遷-」『人間文化創成科学研究論叢』15, pp.349-357.

鈴木寿子・トンプソン(平野)美恵子(2013)「『共生日本語教育実習』における共生を目指した対話活動のデザイン分析-ポジシ

ョニング理論による検討-」『異文化コミュニケーション研究』(25), pp.1-16.

トンプソン(平野)美恵子(2012)「言語少数派の子どもを支える言語と教科の統合学習: 清田淳子(2007)『母語を活用した内容重視の教科学習支援方法の構築に向けて』」『言語文化と日本語教育』(43), pp.31-35.

鈴木寿子・トンプソン(平野)美恵子・房賢嬉・張瑜珊・劉娜(2012)「言語生態学に基づく日本語教師養成プログラムの構築とその可能性-運営メンバーによる内省の分析から-」『言語文化と日本語教育』(43), pp.11-20.

房賢嬉・トンプソン(平野)美恵子・後藤美和子(2012)「持続可能性日本語教育における教師による自己を起点とした視座の醸成-教案作成の過程に見る『同行者としての教師』-」『2012年 東呉大学日本語文学系 日本語教育国際シンポジウム論文集』pp.297-311.

〔学会発表〕(計16件)

トンプソン美恵子(2014)「学部日本語教員養成科目における担当教員の同行者性-学生のふり返りレポートに対するコメントから-」『シドニー日本語教育国際研究大会』口頭発表

トンプソン美恵子・房賢嬉(2014)「学習者体験「創造的課題」会話活動・作文活動・発音練習」『協働学習導入日本語教学実践研究群』ワークショップ 台湾交流協会

トンプソン美恵子・房賢嬉・小浦方理恵・池田玲子(2014)「教師が協働学習を取り入れていくために必要なサポートは何か - 韓国の日本語教師による期待と不安の分析から -」『協働の理念と実践ワークショップ: 協働学習導入日本語教学実践研究群』台湾交流協会

鈴木寿子・佐藤真紀・トンプソン美恵子・野々口ちとせ・房賢嬉・三輪充子・岡崎眸(2014)「持続可能性日本語教育とはどのような日本語教育か」『早稲田大学日本語教育実践ワークショップ』ワークショップ

三輪充子・佐藤真紀・鈴木寿子・トンプソン美恵子・野々口ちとせ・半原芳子・房賢嬉・岡崎眸(2014)「グローバル化社会を生きる力を育てるリベラルアーツ科目の試み- 学生のふり返りに対する教師のフィードバックに着目して-」『第20回 大学教育研究フォーラム発表論文集』p.50-51.

トンプソン美恵子(2013a)「当事者としてグローバル世界を捉える日本語教員養成の試案-日本語教育副専攻科目で何が出来るか-」『韓国日語教育学会 第24回国際学術大会論文集』pp.92-96.

トンプソン美恵子(2013b)「多文化共生を志向する対話の課題 日本語母語話者の内省から」『2013年度異文化間教育学会

第34回大会発表抄録』pp.98-99.

トンプソン美恵子・佐藤真紀・鈴木寿子・半原芳子・房賢嬉・小田珠生(2013a)「持続可能性日本語教育-言語教育への生態学的アプローチ-」『新生医護専科 応用英・日語教学 国際学術検討会』招聘講演 新生医護専科学校(台湾)

トンプソン美恵子・佐藤真紀・鈴木寿子・半原芳子・房賢嬉・小田珠生(2013b)「自己を起点に考えるグローバル社会と雇用の関係」『専科日語教師教学成長研修会』ワークショップ 新生医護専科学校(台湾)

池田玲子・トンプソン美恵子・房賢嬉(2013)「ピア・ラーニングの授業デザインの実際-移行期から発展へ-」韓国日語教育学会 ワークショップ

房賢嬉・トンプソン美恵子(2013)「自己モニタリング力育成を目指す音声教育-教師研修の一試案-」『2013 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.248-253.

トンプソン(平野)美恵子(2012a)「持続可能な共生社会を目指す日本語教員養成の試み-私とあなたと世界をつないでいく過程-」『日本語教育国際研究大会 2012 名古屋予稿集分冊 1』p.342.

トンプソン(平野)美恵子(2012b)「日本語教師として『生きる力』を醸成する日本語教員養成プログラムの実践報告」『第4回協働実践研究会』口頭発表

トンプソン(平野)美恵子・鈴木寿子(2012)「共生日本語教育実習における対話の変遷-シラバスの縦断的分析から-」『言語文化と日本語教育』(44), pp.42-45.

トンプソン(平野)美恵子・鈴木寿子・小田珠生・佐藤真紀・張瑜珊・房賢嬉・半原芳子・三輪充子・岡崎眸(2012)「グローバル化社会をいかに生きるかを考えることばの教室の試み-受講生による認識に着目して-」『2012 年度日本語教育学会秋季大会』pp.111-116.

鈴木寿子・トンプソン(平野)美恵子(2012)「外国人と日本人の対話をどのように深めるか-共生日本語教育実習における『問い』の立て方の変化から-」『2012 年度日本語教育学会研究集会第7回(大阪地区)予稿集』pp.14-17.

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

- 出願状況(計 0 件)
- 取得状況(計 0 件)

〔その他〕(計 1 件)

報告書

『グローバル化社会を生きるための力を育成する授業-持続可能性日本語教育に基づいた授業デザインと成果-』平成24~27年度科学研究費補助金若手研究(B)「学習

者とともに学ぶ持続可能性日本語教育教員養成プログラムの構築」報告書 研究代表者 トンプソン美恵子

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

トンプソン 美恵子(THOMPSON,Mieko)  
早稲田大学・日本語教育研究センター・  
准教授

研究者番号：20401606